No.8011

財団法人新住宅普及会
住宅建築研究所報1981

漁村住宅の空間構成と更新過程に関する研究 (2)

小泉正太郎　三国　政勝
宮崎　隆昌　斉藤　輝二

目　次

1．これまでの経過
2．本年度の研究課題と位置づけ
3．高知県久礼漁業集落
4．千葉県北青柳集落
5．岩手県田の浜漁業集落
6．まとめ
あとがき

1．これまでの経過

本研究は近年の都市化，過疎化および漁業構造の変化の中で，漁村住宅の空間構成（住棟構成，屋敷構，間取り構成等）と住様式の現状と更新過程を知り，漁村住宅の一般性と特殊性を解明すること，これらにより漁村住宅の改善の方向性と供給における計画的在り方をさぐることを目的としている。初年度は京都府伊根，三重県相賀浦，千葉県勝山の3集落の調査を行い，以下の諸点が明らかになった。

① 3集落の漁業方式，地形，歴史的背景により住空間構成及び住様式は異なる。しかし，それらの変化過程は類似している。

② 狭後背地で古くから定置網漁業の発達していた伊根では住宅規模の格差は少なく，密住で屋敷構は無く，田の字型系とたて列型系の2種類の平面型に分化し，伝統的地域生活を重視した住様式である。漁船漁業と真珠養殖業の複合漁業の相賀浦は高潮のため集落移転し，計画的に作られた集落であるが，住宅は伝統的広間型を基調としている。漁業の変化とともに広間を使う地域社会生活は外化および消滅し，家族生活を重視した住様式に変化している。近世から漁船漁業の発達して来た勝山は密住市街地を形成し，漁民特化居住区，中央商店街区，周辺農家混在区と居住地が階層分化している。住宅は続き間型を基調とし，その規模は漁業経営階層別に階層分化している。住様式は類似しており地域社会生活を重視したものである。

③ 住空間構成の変化過程は類似しており，当該集落の基本型→2階建化→土間の消滅→便所，台所，浴室の内部床上化→（中廊下導入）→個室化，が共通している。相賀浦及び勝山では基本型間取りに中廊下を導入して居室を増加する中廊下導入型が派生，増加している。

④ 住宅内の漁業生産行為は相賀浦ではすでに行われていない。伊根及び勝山では漁業経営階層により異なり小型船漁業等の小，零細経営では住宅主屋内で漁具の手入れが行われており，中，大規模経営では付属屋及び共同施設で行っている。

2．本年度の研究課題と位置づけ

2－1　本年度の研究課題

上記の様に3地方3集落の比較研究より多くの個別性と若干の共通性が明らかとなった。本年度はさらに地方及び事例を拡大し，本研究の目的である「漁村住宅の空間構成と住様式の現状及び変化過程を知り，漁村住宅の特殊性と一般性を解明すること，これにより漁村住宅の改善の方向性と供給における計画的在り方を探ること」を追求する。本年度の研究課題は以下のとおりとする。

① 漁村住宅の規模，空間構成，住様式は集落条件によりどのような共通性と個別性を有しているのか。

② 漁村住宅の住空間構成の相違性にも関わらず変化過程は類似している。これらは漁業条件や集落条件を越えて一般的といえるのか。

③ 漁村住宅の住様式は，1）地域社会生活，2）家族生活，3）個人生活，4）イエ生活の4つの生活の充足のされ方及び空間を媒介（場）とした矛盾関係により解明されることが明らかとなったが，これは漁業条件や集落条件を越えて一般的といえるのか。

④ 以上の諸課題を明らかにすることにより，漁村住宅の改善の指針及び供給における建築計画的在り方を解明すること。

2－2　本年度調査地の位置づけ

本年度はさらに地方や集落条件の異なる事例を増やし，それらの住宅の実態を明らかにし，研究課題の諸点を全集落を通し比較研究することとする。本年度の調査

集落と位置づけは以下のとおりとする。

① 久礼集集：太平洋南区の典型的な塊状市街化集落，大中型漁船漁業を基幹とする総合漁業であり，昭和７年の大火で漁民特化居住区（浜分）が全焼し，全戸更新がされた集落。

② 北青柳集落：太平洋中区の塊状主農従漁集落，小都市近郊の元のり養殖漁村，昭和36年臨海工業地開発により漁業権喪失，混住農村となった集落。

③ 田の浜集落：太平洋北区の塊状半漁半農集落，磯根養殖と中小型漁船漁業，定置網漁の総合漁業，昭和８年の大津波により高所移転，計画的に作られた集落。

本年度は太平洋側の高温地方(南区)，温暖地方(中区)，寒冷地方（北区）に分かれ，かつ大火，大津波，漁業権喪失といった特殊事情のある集落である。

表２－１　調査集落の位置づけ

集落類型 / 海区(地方)	列状 主漁従農	塊状 半漁半農	塊状 市街化	塊状 主農従漁	列状 主農従漁
北海道区					
太平洋北区		田の浜			
太平洋中区			勝山	北青柳	
太平洋南区			久礼		
日本海北区					
日本海西区	伊根				
東シナ海区					

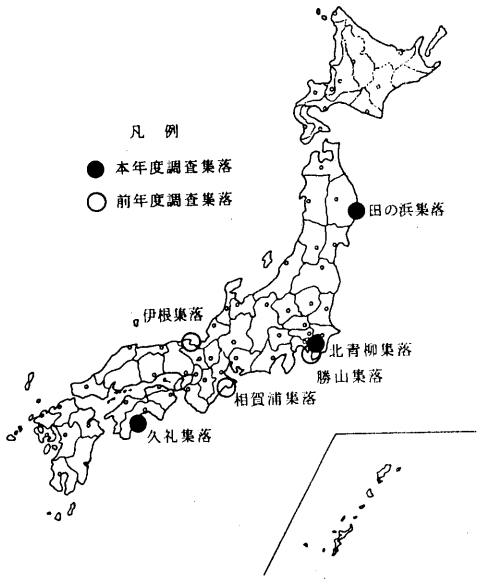


図２－１　調査集落の位置

３．高知県久礼漁業集落

３－１．調査対象及び調査方法

(1)　久礼漁業集落の概要

久礼漁業集落は高知県高岡郡中土佐町の最大の漁業集落である。中土佐町は高知市から53kmの距離にあり，東は須崎市，北は大野見村，西は窪川町に接し，南は黒潮洗う太平洋に面している。年間平均気温20℃以上の暖かい気候であり，また，台風の通り道にもなっている。昭和32年に久礼村と上の加江村が合併し中土佐町が誕生した。昭和54年現在人口9,513人の小さな町である。

久礼漁業集落は東，北，西の三方に急峻の山を背し，南は太平洋に面している。奥の深い良湾久礼湾に面した旧城下町である。江戸時代以前は佐竹氏の城下町として栄え，江戸時代以後は山内氏により郷分，浜分として分け，庄屋を置き統治された。戦前までは漁業，林業，海運業が栄えたが，現在海運業は見るべき姿もない。漁業は河口港で港湾の久礼港を基地にカツオ一本釣りの漁船漁業を基幹とした総合漁業である。昭和54年現在人口6,342人，1,872世帯の大規模集落で漁家率14.4%である。集落は海岸付近の漁家特化居住区，中央部の商店街区，周辺部の農家混在区の３つに階層分化している。街区密度構成も過密街区（ネット建ぺい率60%以上）の漁家特化居住区，過密及び密住街区(ネット建ぺい率41～60%)の中央部商店街区，集住（ネット建ぺい率40%以下）の周辺部農家混在区と階層分化している。過密街区の漁家特化居住区（浜分）は度々大火に見舞われており，特に昭和７年の大火では浜分のほぼ全戸，280戸が焼失している。また，津波や台風の被害も度々あり，近年では昭和45年の台風10号により全壊37戸，床上浸水159戸の被害にあっている。これら浜分のたび重なる大被害はその住宅規模にも大きな影響をおよぼしている。

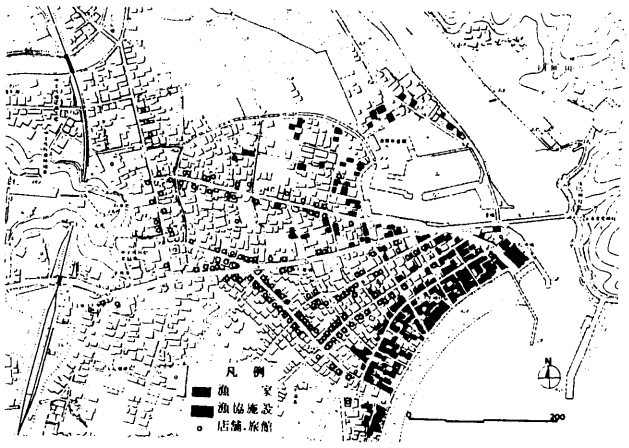


図３－１　久礼集落漁家及び施設分布

(2) 調査方法

調査は1980年11月予備調査を行い，翌81年１月に本調査を行った。調査は階層別抽出し，住宅の敷地配置，間取り，内部のしつらえ及び一部断面図を採集し，住い方の聞き取り調査を行った。抽出住宅は大型船主層５戸（71%），中型船主層５戸（81%），小型船主層11戸（９%），乗組員層10戸（12%），非漁家層12戸（１%）である。非漁家は典型例を考慮し中央部商店街区から半数を抽出した。全体的に典型例となるように地元の老棟梁及び漁協組合長の意見を参考にし，抽出した。

表３－１　調査対象

	中土佐町	久礼集落	調査数	抽出率
人口	9,513人	6,342		−
世帯数	2,834	1,872	46	2.5%
地域特性	旧２城下町の合併	旧城下町居住地階層化		−
漁業特性	３漁業集落一本釣，定着	港湾,総合漁業,カツオ一本釣	階層別抽出	−
漁家数	476	270	33	8%
大型船主	7	7	5	71%
中型船主	9	6	5	83%
小型船主	234	126	11	9%
乗組員世帯	149	94	12	12%
非漁家	2,358	1,602	13	0.8%

３－２．住空間構成

(1) 屋敷構

久礼集落の住宅の特徴は密住のため中央部の大商店を除き大部分が屋敷構を持たないことである。特に漁家特化居住区の浜分では街区のネット建ぺい率は70%を越えており，主屋のみが細い路地に短冊状に並んでいる。漁家で屋敷構を持つ者は新宅地造成地に脱出した一部だけである。しかし，これらを含めほぼ全戸が主屋と同一敷地内に漁具は持たない。漁具庫は漁港の後背地，新造成地の共同賃貸漁具庫を使用している。商店街区の非漁家で屋敷構を持つ例は図３－５－１である。全て土蔵造りで，道路に面した正面に主屋，その後ろにカマヤ，中庭を挟み倉及び納屋を持つ囲み配置の構成である。

(2) 住宅規模

住宅規模は全体的に小さく，若干の階層性がある。平均敷地面積は大型船主層203.2m²(53坪)，中型船主層93.5m²(24.4坪)，小型船主層77.4m²(20.2坪)，乗組員層74.3m²（19.3坪），非漁家140m²（36.4坪）であり，大型船主層を頂点に階層分化している。また，非漁家層は中央部商店街区では260m²以上，浜分では50m²以下と２極分化している。

住宅の延べ床面積も図３－２に見るとうり大型船主層を頂点に階層分化している。平均延床面積は大型船主層142.8m²（37.2坪），中型船主層101.6m²（26.5坪），小型船主層95m²(25坪)，乗組員層84m²（21.9坪），非漁家層106.5m²（27.7坪）である。非漁家は150m²以上と50～80m²に分化している。

居室数も同様に大型船主層を頂点に若干の階層性がある。平均居室数は大型船主層7.2室，中型船主層5.7室，小型船主層5.8室，乗組員層4.5室，非漁家層5.6室である。

平均建ぺい率は大型船主層56%，中型船主層77%，小型船主層及び乗組員層80%，非漁家層71%である。中央部商店街区の非漁家層は建ぺい率50～60%と比較的低い。全体的に建ぺい率は高く，大型船主層，中央部商店

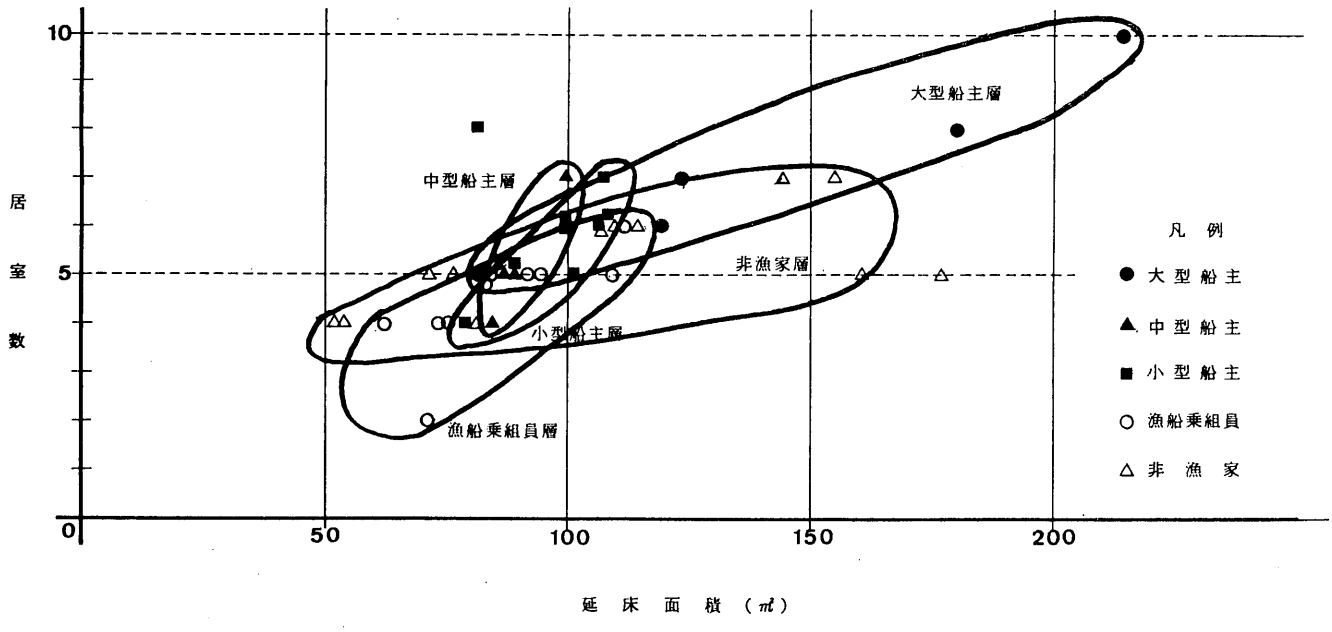


図３－２　住宅の延べ床面積

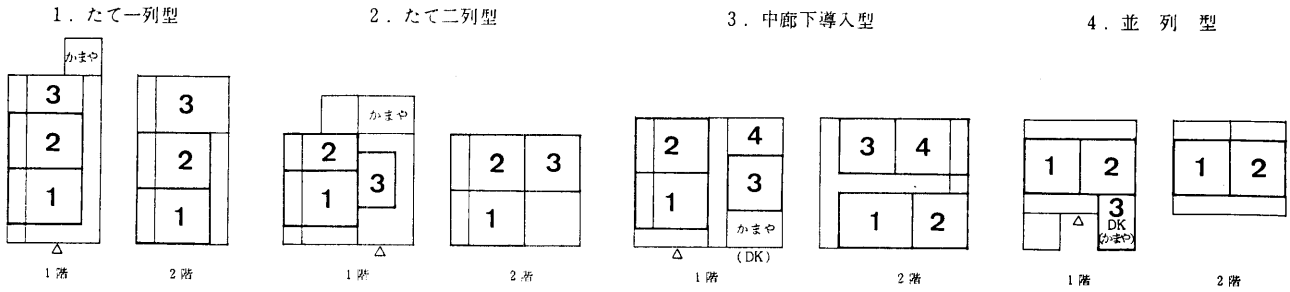


図３－３

街区の非漁家を頂点に若干の階層性がある。

(3)　間取り型

久礼集落には全体を通して共通の間取り型が見られる。それは4.5帖，4.5帖（３帖）の２室に別棟のカマヤ（釜屋）をニワ（通り庭）で結ぶ構成である。表側の4.5帖には床の間，神棚(高神様)，仏檀は奥の室に付けられる場合も多い。このプロトタイプは同町内の上の加江集落にもあり，また，高知県教育委員会調査「土佐の民家」（昭和45年林野全考近畿大助教授主査調査団）には見られない型であり，「中土佐（町）型」と呼ぶことが出来よう。

現在の採集プランを分類すると図３－３に見るように４タイプになる。タイプ１は「たて一列型」で典型的中土佐型であるが，これに後方１室を増加し，かつ２階がついている型である。タイプ２は「たて二列型」で中土佐型に横に一室付いた型である。タイプ３は「中廊下導入型」で中土佐型に中廊下を付け，1～4室付け加わった型である。タイプ４は「並列型」で中土佐型を横にし，カマヤまたはＤＫが前に付け加わった型である。いずれも２階建てが多く，２階の間取りに共通性は見られない。

間取りの分布は全体的には「たて一列型」が最も多く，次いで「中廊下導入型」「並列型」「たて二列型」の順である。間取りの分布は若干の階層性があり，大型船主層は中廊下導入型，中型船主層は主として「たて一列型」，小型船主層は全型が混在し，乗組員層は主として「たて一列型」，非漁家は「たて一列型」が主で，中央部商店街区の非漁家層は「並列型」である。これは敷地の大きさ，間口ー奥行きの広さとも関わっている。

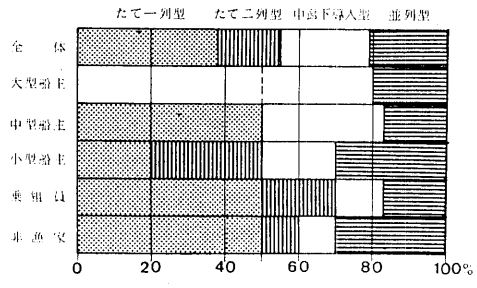


図３－４　階層別間取り構成

表３－２　階層別平均住宅規模

	敷地面積	延床面積	居室数	建ぺい率
大型船主層	203.2㎡（52.9坪）	142.8㎡（37.2坪）	7.2室	55.6％
中型船主層	93.5〃（24.4〃）	101.6〃（26.5〃）	5.7〃	77.0〃
小型船主層	77.4〃（20.2〃）	96.0〃（25.0〃）	5.8〃	79.9〃
乗組員層	74.3〃（19.3〃）	84.0〃（21.9〃）	4.5〃	79.8〃
非漁家層	139.8〃（36.4〃）	106.5〃（27.7〃）	5.6〃	71.0〃

ただし　１坪＝ 1.96×1.96＝3.84㎡

３－３．住様式

久礼集落の住い方には一定の規則性があり，「中土佐型」住居の住い方をプロトタイプとし，型別に若干のバリエーションがある。すなわち「お正月様迎え」「乗り初め」「八幡様の祭り」等の「ハレ」の場としての住居と，日常生活の場としての住居である。この二つの場の組合せにより住居空間が成立する。ハレの場としての玄関側居室番号１の室，日常の家族員の食事，団らんに使われる３の室，多人数の客寄せ時に続き間として使われ，日常的には家族員の団らんに使われる２の部屋，調理のためのカマヤまたは台所，２階は家族員の寝室として使われている。以下「中土佐型」の典型である「たて一列型２室構成」で詳しく見よう。

(1)　ハレの場としての居室構成（非日常的使われ方）

「たて一列２室構成」では１の居室は床の間，神棚（高神様）があり長押が回っている。２の居室は仏檀があり長押は無い。１の室で「お正月様迎え」が行われる。これは床の間の壁に，天照皇大神を中央に，左右に久礼八幡神社，海津見神社の掛軸をかけ，床の中央に供物台，両端に榊を生け，両方にしめ縄を渡し飾り付けをする。この床の間の前に家族全員が集まり，お神酒をあげ，正月を祝う行事である。ここで正月の共食を行う家もある。別に正月の２日に 乗り初め「お船祝い」の儀式を持つ。これは各船主が自船の乗組員を招き，正月の挨拶をし，

酒宴を行うものである。乗組員のいない船主は親戚友人を招く。この行事は大人数の場合は1と2の室を続き間で使う。2階に床の間，高神様を置き，ここで行う家もある。小人数の場合は主として1階の1の室が使われる。

久礼八幡様の祭り（9月15～16日）の場合は，床の間中央に久礼八幡神社の掛軸をかけ，榊，しめ縄等の飾りを付ける。祭りの頭屋は氏子総代や役員を呼び，頭屋から大松明（おみごくさん）を送り出すので大事な役を負っている。頭屋はこの儀式のため改装をしなければならず，費用負担は大きく町内会や町から援助金が出る。頭屋でない多くの家は友人，縁者を招き振るまい酒をし，宴をはる。この場合も小人数なら床の間のある1の室，大勢の場合は続き間として使える室で主として1階で行われる。

(2) 日常的使われ方

久礼集落の住宅規模は全般的に小さく，神聖空間が「ハレの場」として独立しているのではない。これらは日常的には寝室であり，一家団らんの居間として使われている場合が多い。以下型別に日常的使われ方を見よう。

「たて一列型」2室構成，の中土佐型では，1の室は神聖空間としての独立性が高いが，寝室としても多く使われている。すなわち，日常的には，まず客と対面，応接する場であるが，老人の寝室として使われている。2の室は団らん，食事が第一で就寝が第二である。3室構成型の場合，3の室は大部分が食事である。2階は大部分が就寝であるが，2室構成の場合2階が客寄せ空間にもなっている。

「たて二列型」は神聖空間の独立性が若干高い。1の室は主として客寄せと団らん，2の室は客寄せと就寝，3の室は調理と食事が最も多く，就寝もわずかにある。「たて一列3室構成」とほぼ同じである。

「中廊下導入型」では居室数が多いせいか，1と2の客寄せ空間の独立性が他の型より高い。しかし、1は客寄せと団らんが第一で，客寄せのみは第二である。2の室は客寄せと就寝が第一で，客寄せのみは第二である。3及び4の室は団らんと食事が主である。2階は大部分が就寝である。

並列型では，1の室は客寄せが第一であるが，団らん食事の茶の間としても使われている。2の室は客寄せと就寝が大部分であり，この室に床の間，神棚を置き，長押を回している家も多く，この室が神聖空間となっているといえよう。3の室は調理と食事が主でありDKとなっている。

以上より久礼集落の住宅は「中土佐型」の2室構成を原型とした一定の住様式があることが判明する。

3－4．住空間構成の変化過程

採集平面図の増改築部分を取り(スクリーントーン部)原形が判明できるようにし，時代順に並べた。昭和7年に大火があり，浜分でそれ以前の形をさがすのは困難である。最も古いものは大正4年であり，土蔵造りのため焼失をまぬがれた家である。全体的には大きな変化はないが以下の5時代に区分できる。

(1) 第一期（大正一昭和15年）

第一期は「たて一列2室構成」に別棟のカマヤを持つ型，「たて二列3室構成」及びそれを横にした「並列型3室構成」である。並列型3室構成は中庭を見る間取りで，玄関側に「仏間」1室，中庭に面して座敷が2室並ぶ型で中央部商店街区の非漁家（元大商人）である。

(2) 第二期（昭和15—24年）

この期になると新築当初より2階建が建てられている。1階は第一期と同じであるが2階に寝室としての居室が出現する。

(3) 第三期（昭和25—34年）

この期は1階に中廊下を設け，茶の間が1室増加する「中廊下導入型」が出現する。また，別棟のカマヤが土間ではあるが主屋と同一棟に入って来る。

(4) 第四期（昭和35—44年）

この期は土間に床が張られダイニングキッチン(DK)が出現し，以後増加する。また浴室が主屋内床上に造られるようになる。それ以前の小住宅は浴室を持たず，大規模住宅では土間に風呂場として設けていた。この期に」たて一列3室構成2階建」が出現する。

(5) 第五期（昭和45年以後）

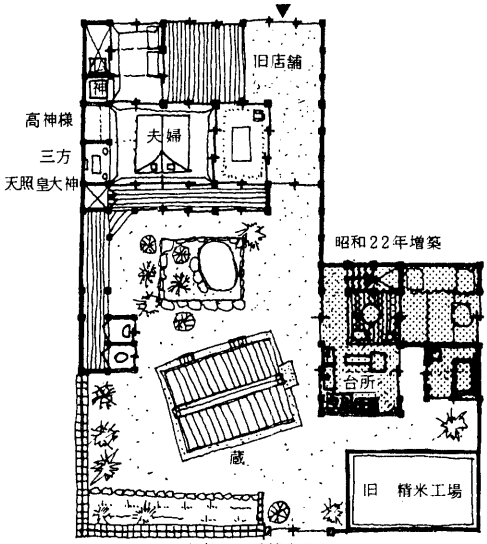
この期は第四期と基本的には同じである。ただ，大規模の居室数の多い中廊下導入型が増えている。これは港の後背の新造成地に大，中規模船主が転出し，この型の住宅を建てているからである。浜分では「たて一列3室構成2階建」が増加しつつある。

3—5．まとめ

久礼漁業集落の住宅は，「中土佐型」ともいえる2室構成にカマヤ（釜屋）を持つ平面型を基調とし，それが敷地形状により「たて一列型」「たて二列型」「並列型」及び「中廊下導入型（発展型）」とバリエィションを持つ。住宅規模はこの基調を持ちつつ，大型船主層，中央部商店主層，中型船主層，乗組員層，浜分の非漁家層と階層分化している。

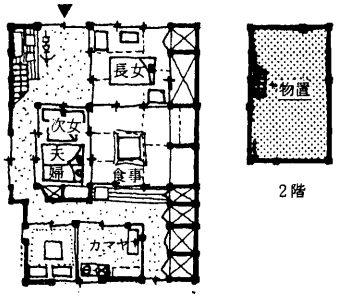
住様式はほぼ一定している。すなわち1階1室または2室を地域行事を行う地域社会生活空間，奥2室は団らん，食事等の家族生活空間，オモテの1室または中央部の1室は床の間，高神様をおき正月行事等を行うイエ生活（神聖生活）空間である。2階は就寝等の個人生活空間である。1階の1または2の室も個人生活空間となっている場合もあり，重複している場合もある。1階の2室

1. 大正４年



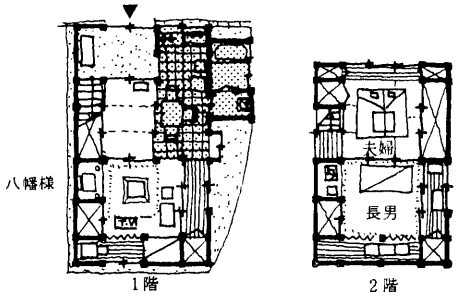
（商業・元精米業）

2. 昭和８年



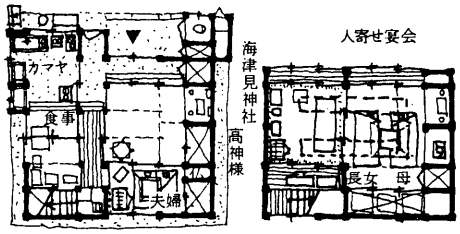
１階
（漁船乗組員）

3. 昭和19年＜２階の出現＞



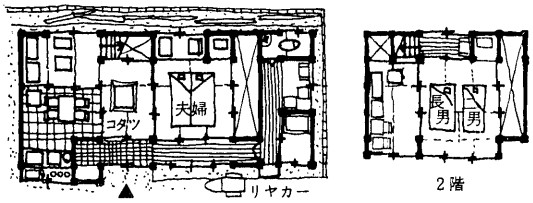
（漁船乗組員）

4. 昭和29年＜中廊下導入型の出現＞



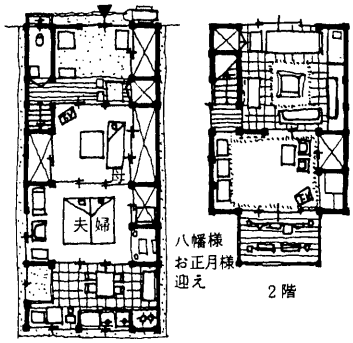
（大型船主）

5. 昭和37年＜DKの出現＞



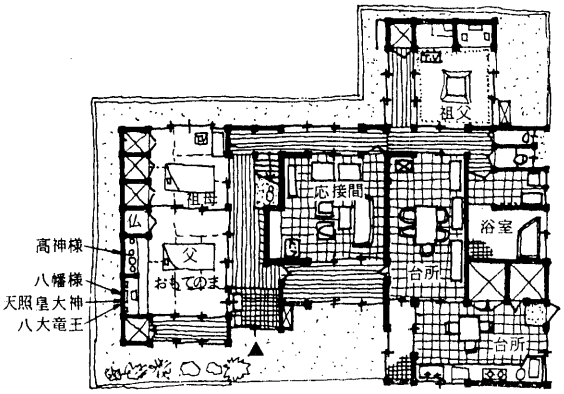
（小型船主）

6. 昭和44年＜たて列三室型＞



（小型船主）

7. 昭和45年＜大規模中廊下導入型の出現＞



（大型船主）

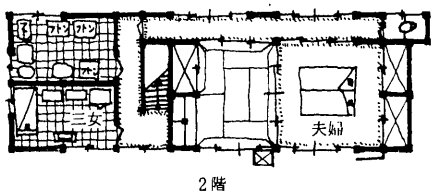


図３－５　久礼集落住宅の変化過程

構成に，イエ生活，地域社会生活を重視し，個人生活が1部重複しているこの様な型を「中土佐型」住様式といえよう。

住空間の変化過程は他地域と同じといえよう。昭和初期に2階建て，居室拡大が興り，戦後は基本型を有しつつ中廊下が入り茶の間や食事室が独立し，また，別棟のカマヤが主屋内に入ってくる。昭和30年代後半に土間に床が張られＤＫが出現し，浴室が主屋内化する。地域伝統生活を重視しつつ個室化が進んでいる。

4．千葉県北青柳集落

4－1．調査対象及び調査方法

北青柳は，千葉県の中央部に位置する市原市の海岸部に形成された京葉臨海工業地帯に隣接する一集落であり，古くより零細な半農半漁が営まれていた。明治30年代にのりの養殖が始まり，以後それが主要な産業となったが，工業地帯造成のため海の埋めたてが計画され，昭和36年頃，一帯の漁民はすべて漁業権放棄を余儀なくされた。それまでは戸数150戸程で，そのうちの約7割が半農半漁，3割が専業漁業を営み，夏は飯米確保程度の稲作と沿岸漁業，冬はのりや貝の養殖等に従事していたが，その後，商店やアパート経営，或はサラリーマン等への転業が行なわれた。しかし，近代的な職種に対して適応性を欠く者が多く，成功例は少ない。

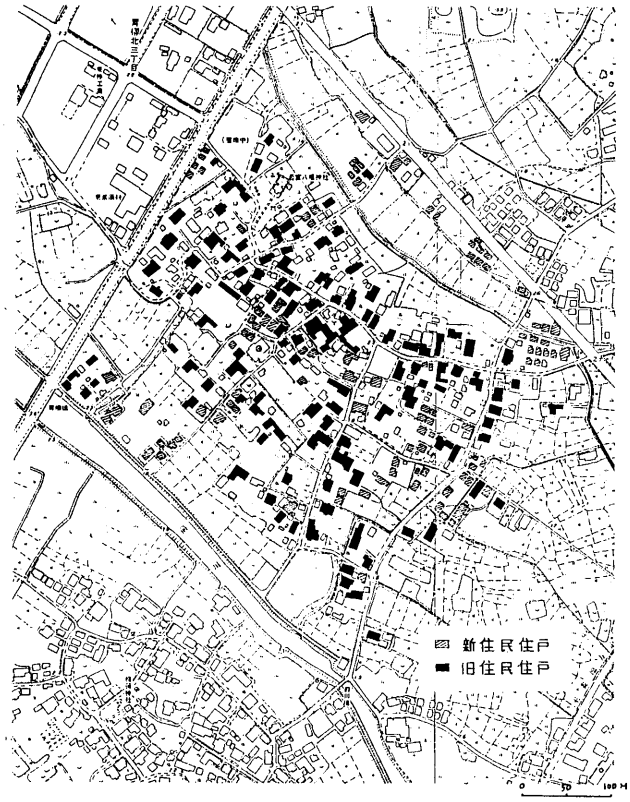


図4－1　集落内の住戸分布

開発後，集落内には新しく進出した企業に勤める新住民が多数移り住むようになり，現在では280戸程になっている。集落の中心部には部落集会所があり，スーパーマーケットや食料雑貨店，肉屋，魚屋，八百屋などの店舗が一応揃っている。

調査は，昭和54年8月に，100戸を対象として，15才以上の家構成員に留置式アンケートを依頼し，翌55年7月に，主に従来からこの地に住んでいる旧住民の世帯59戸の住居の間取りを採取し，あわせて住まい方等に関するヒアリングを行なった。

表4－1　調査地及び調査の概要

北青柳旧漁業集落		
人口		1150人
世帯数		280世帯
漁業従事世帯数		0
漁家率		0
部落数		1
組数		11
組平均世帯数		15世帯
生産形態		のり養殖→転業
調査住戸	間取り調査	59戸
	住まい方調査	57戸
	アンケート調査	96戸（239名）

注1.　新住民は殆んど部落組織に未加入
注2.　新住民の間取り調査は2事例のみ

4－2．住空間構成

この集落は，かつて遠浅の東京湾に面していた平地集村で，居住地の平均住戸密度は14戸/haにすぎず，漁村というよりも農村的特長を強く持っている。敷地面積は200㎡前後から1000㎡以上まで巾広く分布しており，生垣やブロック塀による屋敷構えをもつ。建蔽率も低く，10%から30%位までが大部分である。

この地区の住居の平面型は，居室の並びがほぼ1列になる並列型系，田の字型や6つ間型等の田の字型系，居室が2列構成でその表側と裏側が概ね壁で区画されている続き間型系，それらを原型としてそこに中廊下を入れた中廊下導入型系，の4類型に区分することができる。

調査した57戸中，並列型系が約1割，続き間型系が3割，田の字型系が2割，中廊下導入型系が3割という比率である。敷地が広いので別棟を設けている場合が4割近くあり，2階家も全体の4割程みられる。土間を有するものは1割にすぎないが，食事の場がＤＫ式であるものが8割以上みられ，殆んどの住居が続き間構成をもっている。

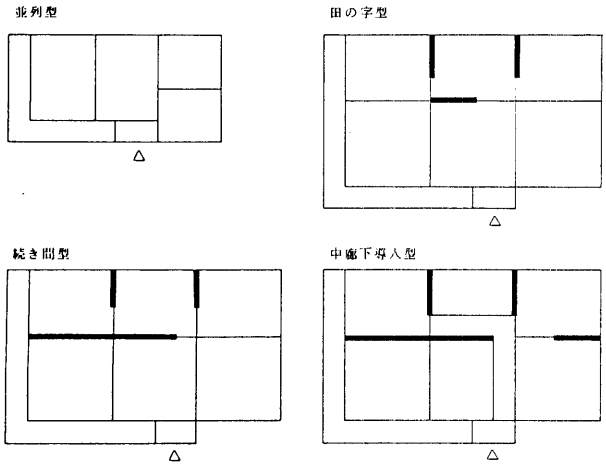


図４－２　住居の平面類型

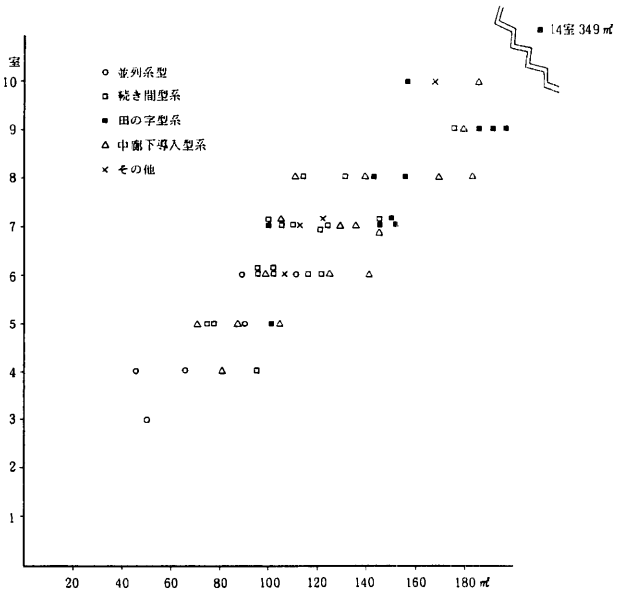


図４－３　平面類型別住居規模

住居の規模としては，延床面積の最小が45m²，最大が349m²で，大きな差があるが，これらは例外的で，90m²から160m²の間が多く，全体の約７割を占める。居室数は３室から14室まで分布しているが，７室が最も多くて約３割，５室から８室の間が約７割以上を占める。居室の広さは，全般に６帖及び８帖が多い。

４－３．住様式

(1)　日常的使われ方

全般的に，母屋と別棟，或は１階と２階で住み分けをしている場合が多く，主に若い世代が別棟や２階を就寝室として使っている。食寝分離，就寝分離はほぼなされているが，一方で，食事，団らん，接客等の集まり行為が同じへやで重なって行なわれていることが多く，特に団らんと接客の重なりが多い。

平面類型別に，就寝，食事，団らん，接客の各行為が住居内のどの部分で行なわれているか，その位置関係をみると，並列型系では，食事は勝手側のへやで，団らんも玄関から勝手寄りの方で行なわれ，接客は勝手側がやや多いが，玄関のとりつく中央のへやを中心として左右に広がり，就寝は勝手と反対側のへやを主として勝手側の方へ広がるという領域構成になっている。田の字型系では，食事は勝手寄りの裏側のへや，団らんは玄関のとりつく表側中央のへやを中心として勝手側へ寄っている場合もあり，接客は表側の続き間ざしき，就寝は裏側のへやが全般的に使われている。続き間型では，田の字型系と根本的な違いはみられないが，団らんが勝手寄り表側のへやを中心とし，食事や接客もこのへやが使われている例が多くなり，また就寝が勝手と反対側の表側へ出て来ており，全体的に表側へ生活の場が移っていると言える。中廊下導入型系も続き間型とほぼ同様の傾向を示している。

(2)　非日常的使われ方

北青柳には，伍長，什長と呼ばれる近隣のつながりがあり，また，八日講，子安講，かのえ様，十九夜といった各種の講集団があり，定期的に集まりをもっている。これらの集まりは，多人数の場合や集会所に近いグループの場合は集会所を利用することもあるが，概ね構成メンバーのもち廻りで各々の住居の続き間が利用されており，続き間の存在が大きな意義をもっている。続き間の使われ方としては，日常的には１室が集まり室として，他が就寝室として使われる場合が多いが，非日常的な集まりの際には２間を続けて使うことが殆んどで，３間続きで使うことや逆に１間だけの場合は少ない。

また，非日常的な行事の一つとして，毎年７月に行なわれる祭りの際に各地から親類縁者が集まってくるが，大部分の住居がそうした時の泊まり客を受容し得るへやの余裕をもっていることも重要な点である。

開発後，それぞれの仕事が異なるものになったため，日常的な近隣のコミュニケーションがうすれつつあるが，上記のような組織的なつながりが存続し，各々の住居が媒体の一つとなって地縁性を維持する役割を果たしている点注目に値する。しかし，こうした集団に新住民が殆んど係わっておらず，日常的なつきあい関係も乏しい点に大きな問題がある。

４－４．住空間構成の変化過程

平面型の変化をみると，明治時代以前は広間型や６つ間型，田の字型等が多く，並列型も古くから建てられている。２階家は殆んどなく，大部分が土間を有していた。大正時代から昭和20年頃までは並列型系が多く，田の字型系統が少なくなっている。戦後，昭和35年頃までは並列型や続き間型が多く建てられ，中廊下導入型系が少しづつ現われ始めた。この頃はまだ平家が多いが，土間はあまり設けられなくなっている。漁業権放棄の補償金によ

表４－２　新築住居の平面類型の変化

	～大正4年	5～14	昭和1～9	10～19	20～29	30～39	40年～
並列型系	3	1	3	1	3	0	5
田の字型系	6	1	0	0	0	3	1
続き間型系	0	1	1	1	4	3	4
中廊下導入型系	0	0	0	0	1	2	9
その他	0	0	0	0	0	1	3

〔注〕▨ 増改築部分

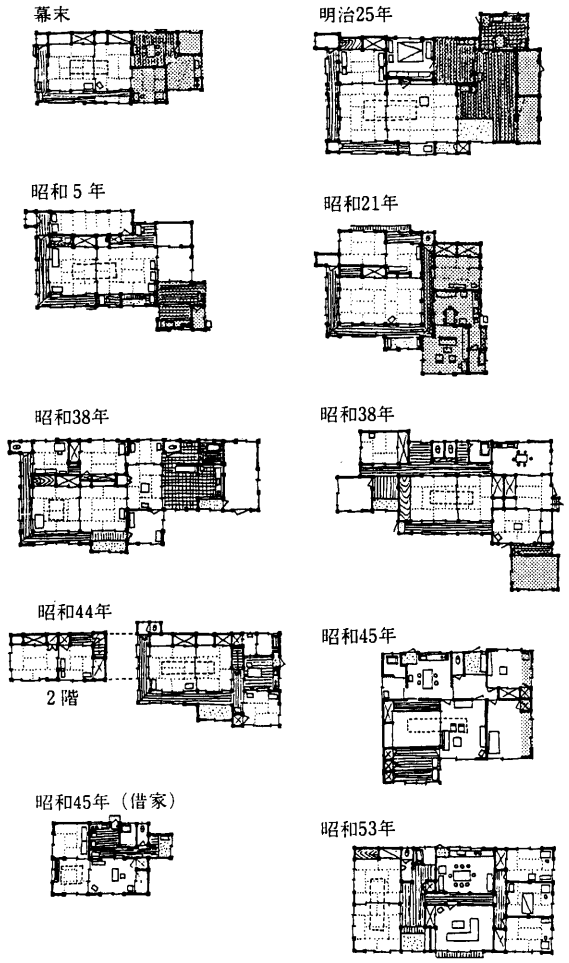


図４－４　住宅の変化過程

り，昭和30年代の末に新築ブームが起きたが，この時には並列型系や続き間型系が多く，また中廊下導入型系や田の字型系も建てられ，多様性を示している。その後昭和40年代に入って中廊下導入型系が増加し，更に都会的な住居もみられるようになって来ており，２階家が増えている。その反面，田の字型系や並列型，続き間型はあまり建てられなくなった。

住居の増改築も数多く行なわれており，その結果並列型から続き間型あるいは中廊下導入型に変化したものも多い。また，土間を改築して床上げしたものや２階を増築したものが多くみられる。

規模の変化をみると，大正時代以前に新築された現存する住居の新築当時の推定延床面積は平均130㎡程度であり，昭和初年から30年頃までのそれは90㎡程度であったが，その後は120㎡程度になっている。居室数は，大正時代以前のものは平均5.7室であるが，最近新築のものは平均6.9室になっている。

また，昭和40年頃までに新築された住居の過半数が増築によって規模を拡大しており，特に当初100㎡以下，居室数４室以下であった場合に顕著である。

しかし，転業後は家族の生活時間のずれが生ずるようになり，これと別棟や２階などの設置，住居の拡大に伴なう個室化などが相俟って家族間のコミュニケーションが薄れるという現象がみられ，問題となる所である。

５．岩手県田の浜漁業集落

５－１．調査対象及び調査方法

(1)　山田町の概要

山田町は昭和30年の合併により旧山田町・旧大沢村・旧織笠村・旧船越から山田町に統合され，字別では山田・大沢・織笠・船越の４地区であり，船越を除いては１地区＝１集落単位＝１漁協単位＝１漁港単位である。船越は３集落で１漁協単位，４漁港である。

山田町の人口は25052人，世帯数6182で人口は安定しているが世帯数の増加が目立つ。

就業構造は第１次産業41.2%，第２次産業24.2%，第３次産業34.4%で第１次産業が一番高い数値を示すが，昭和30年以降の減少が目立つ。第２・３次産業は増加しつづけている。第１次産業のうち農業・林業の減少が大きく漁業は漸減傾向であるが全体の27.1%を占め、山田町における主要な産業の１つである。漁業は，定置網，いか釣・採貝草と湾を利用したわかめ・ほたて等の養殖が盛んであり，同年操業のできる恵まれた条件下にある。近年の漁船の大型化，動力化が急速に進み，交通網の整備と相俟って漁港を基点とした産業活動が多様化しており社会的情勢の変化に対応すべく漁港の整備が進められている。

(2)　［田ノ浜］漁業集落の概要

三陸沿岸地域は日本有数の津波災害地域で

①　沖合の日本海溝，及びその斜面上で大規模の海底変動が頻繁に発生する。

②　三陸沿岸がリアス式海岸であるため，Ｖ字型あるいはＵ字型の港湾に富む。

以上２点が主な理由であるが，田ノ浜においても，明治29年・昭和８年・昭和35年の３度の津波を受け，明治29年では全戸流出といった大惨事を招いている。明治29年の津波では船越地区・田ノ浜地区は全戸流出しその後高地移転を試みるが挫折し，昭和８年の津波後，全部落（船越地区・田ノ浜地区）移転の敢行に踏み出す。移転場所は田ノ浜地区の海岸より約300mを隔たる高台であ

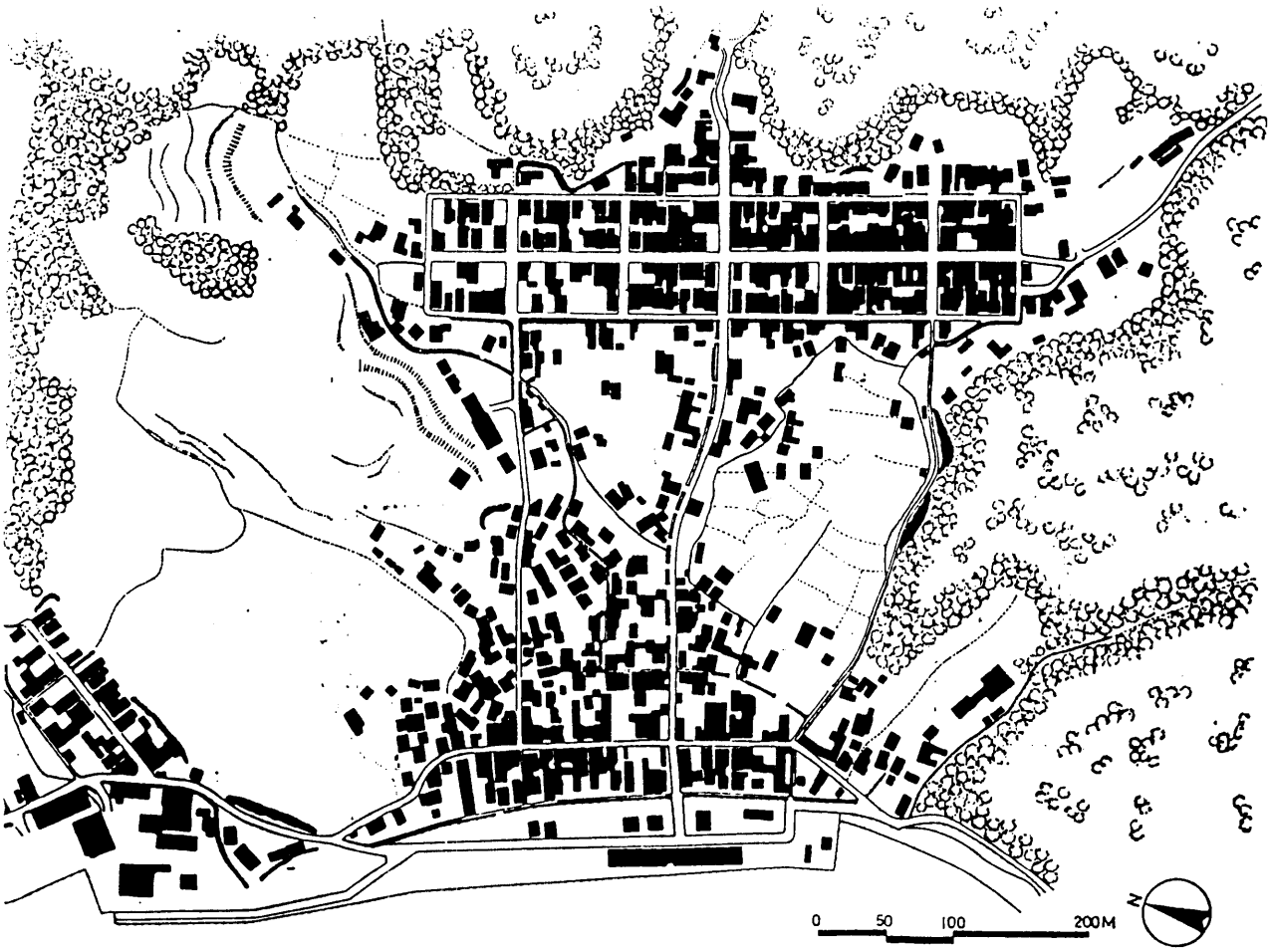


図５－１　田ノ浜集落図

り，地形に合わせ面積12,197坪の扇形市街地を開き，３本の海岸との連結道路をとり，明治29年時の波高は11ｍ，昭和８年時は９ｍであり，計画地の高さは14.7m以上とした。この計画地には船越地区も移転している。計画地は約470mと100mの矩計地で周囲は幅約５ｍの道路で囲み，10m幅の十文字の道路で12に区画され，更に１区画内を50坪（5間×10間）の敷地２列に地割りされ，１区画は12～16の地割から構成されている。区画地の敷地は役場が買い入れ，区画整備後住民に分譲するといった方法がとられた。昭３５年の地籍図ではすでに低地の細分化が進んでおり，港側から高地側に向っての土地割りの広がりを見せていることから，高地移転後，低地地区移住が起こり，更に分家や移住者による低地地区の自然発生的な宅地造成がみられる。

(3)　調査方法

調査は，1980年５月に予備調査を行い，同年８月に本調査を行った。予備調査においては山田町の５集落（大沢，山田，織笠，大浦，田ノ浜）を調査し，各集落における居住特性，生産形態，空間構成について分析した。本調査では，予備調査における知見を基に「田ノ浜」集落の悉皆調査を意図したが，全戸の約７割の戸別調査をするに止まった。

調査の目的は津波の被害により，高地移転した住宅の立地特性，変化過程を，①　住宅の敷地配置，②　間取り，③　内部のしつらえ，④　住宅の変化過程によって考察しようとした。調査対象は昭和８年津波以前の住宅，津波以後の復興地住宅，昭和30年代，昭和50年代の各住宅157戸である。又高所の復興地と漁港付近の埋立地及びその間のスプロールした所等について比較検討することができる様に調査を行なった。勿論漁家，非漁家を含んでいる。集落の変遷及び生活環境形成上の問題点を検討するために町役場，公民館，漁協等において聴取を行なった。

５－２．住空間構成

(1)　屋敷構

傾斜によって南北に長く，道路に囲まれた計画地は，港に平行方向の中央道路と垂直方向の５本の道路で12ブロックに分割され，側溝は１ブロック（以下区画）の周囲を囲むように流れている。１区画は50坪（５間×10間）の東西に細長い敷地が港に平行して２列の12×16に分割されている。前列の敷地に比べて後列の敷地は50～80cm位高く，横１列内の敷地の高さは同じで連続した敷地を15～20cm位の側溝によって区画している。前列の住居は周囲を取り囲む道路のうち，港に平行した港側の道路よ

り２～３段の階段，またはスロープでアプローチするのに対し，後列の住居は反対側の道路から直接アプローチする形態をとり，住居の構えが南向きの南玄関が基本型となっている。このような宅地割の制約から，住居と道路の関係よりアプローチ側の道路（港に平行した道路）で連結した６～８軒（１区画１列）で住居単位空間を形成し，２対の住居単位より１つの集住単位を形成している。道路により単位空間が形成・連結され，界隈性の高い空間とし利用されている。また道路により連結され，住居群を形成するが，その広がりや形態を規制しているともいえる。区画地外の住居形態には規則性はなく，まとまりは薄い。

敷地内の配置は，風呂・便所・物置は，カツテの奥に設けられるのが一般的であるが，主屋の構え方が右カツテ，左カツテの両方の形態をとるため，物置等の位置にも影響する。しかし，アプローチ側から奥にカツテを構えるのが多いことから，風呂・便所・物置もそれに準じ風呂・便所の主屋内・主屋外は関係なく，この形態をとる。敷地は細長く，玄関前は１ｍ程の道路しかなく，庭を設ける場合はカツテの前（物置前）にし，洗濯場，物干場，漁具の手入れ場所として利用する。敷地は土のままか部分コンクリート（玄関前）である。庭先に小さな花壇や植込みをつくり視界をさえぎるようにしている。

(2)　住宅規模

区画地の敷地は50坪づつ区画されているため165㎡前後の敷地が多く，２区画分の敷地を有する住宅もあり，その場合は232㎡以上となる。区画地外の低地は200㎡以上の敷地が殆んどである。堤防周辺の敷地は150㎡以下であり住居が密集している地区である。「建築面積」区画地では67～84㎡・85～99㎡・100㎡以上の３つの階層あり，低地では67～84㎡・51～66㎡・50㎡以下の３階層であり，低地の住居は敷地が広いが住居自体はコンパクトになっているといえる。「延床面積」は全体的に，67～99㎡・100～132㎡・133～168㎡の階層的分布がみられるが，建築面積の関係から区画地より低地の住居の方が２階建てが多いといえる。昭和８年に計画地への移転がなされたため，建築年代は昭和８年以降になり，昭和35年のチリ津波以降に集中する。区画地は昭和８年～11年が全んどであり，低地では昭和40年以降の建築が目立つ。平面類型は区画地は広間型・変形広間型・中廊下導入型が中心であり，低地は並列型・中廊下導入型・中廊下型が多い。建築年代との関係から，広間型・変形広間型→中廊下系へと変化し，２階建ても多くなるといえる。総合的に分析すると，広間型・変形広間型は昭和８～10年，中廊下導入型・中廊下型は昭和40年以降が多く，並列型は昭和10年頃から昭和50年頃まで建てられている。敷地面積と建ペイ率の関係から，区画地は110㎡と85㎡位の建築面積（建ペイ率50～70％）が多いのに対し，低地では建築面積が80㎡以下（建ペイ率40％以下）のものが多く，低地の建築年代が新しいことから，住居がコンパクト化し，敷地面積に関係なく，実用的に建てられているといえる。延床面積は110㎡位以上が多く，２階建てが多いといえる。（１階建てと２階建ての境は100㎡前後）特に110～125㎡に集中している。「居室数」は，建築年代・平面型に関係なく６～８室であり，就寝面積率は25～30％・35～40％，就寝面積は６～９㎡が多い。各室面積は，常居，ダイドコの８畳の場合があるが，全んどが６畳構成，中廊下型では６畳に格化される。建築面積・居室数・１人当りの就寝面積の関係から，個室重視の傾向にある。間口は６～7.5間，９～9.5間であるが，奥行は3.5～４間に一定しており，全ての平面型についていえる。中廊下型は低地に卓越した平面型であり，住宅規模・室面積が他の平面型と異ってきており，高地と低地の住宅に違いが生じてきていると思われる。

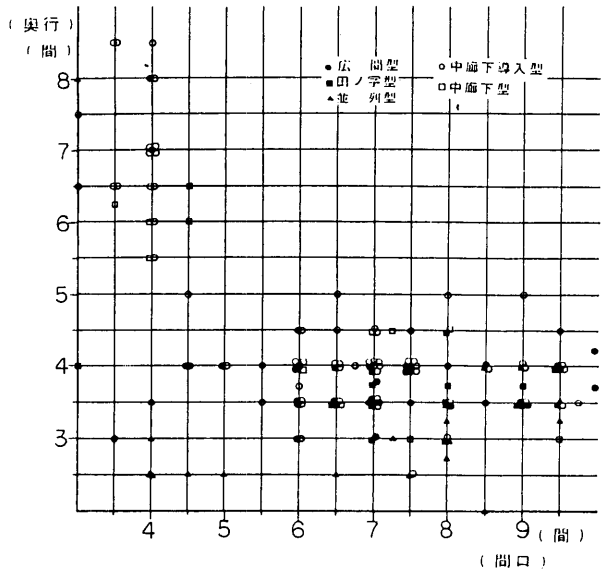


図５－２　平面型別の間口と奥行き

(3)　間取り型

田ノ浜の住居は「奥座敷・前座敷・常居・ヘヤ・ダイドコ・カツテ」と呼ばれる部屋から構成され，広間型・変形広間型・並列型・中廊下導入型・中廊下型の５類型に分類できる。

① 広間型:常居またはダイドコと呼ばれる部屋が居間的に利用され，奥座敷・前座敷・部屋・常居で田ノ字（食い違い田ノ字）を形成するもの（田ノ字の中に居間的空間が組まれている），奥座敷と前座敷の二間続に常居・ダイドコが並んでいるものがある。常居には，仏壇・神棚が設けられている。

② 変形広間型:奥座敷・前座敷・ヘヤ・常居で四間（食い違い田ノ字）を形成し，ダイドコが居間的空間となる。（田ノ字の中には居間的空間は組まれない）。

③　並列型:奥座敷・常居・ダイドコ・カツテ等の居室が1列に並んでいるもの。片側廊下のものも含み，常居かダイドコが居間的に使用される。

④　中廊下導入型:部屋と部屋の間に廊下が加わったものであるが，平面構成・行為は従来の形態が保持されており，広間中廊下導入型・変形広間中廊下導入型・並列中廊下導入型がある。常居またはダイドコが居間的性格を有している。

⑤　中廊下型:部屋と部屋の間に廊下が加わったものであり，従来の平面構成・行為が崩れている。(常居またはダイドコが奥に入ったり，居間的居室が奥になる。)

各呼び名の部屋の元来の行為は以下の通りである。

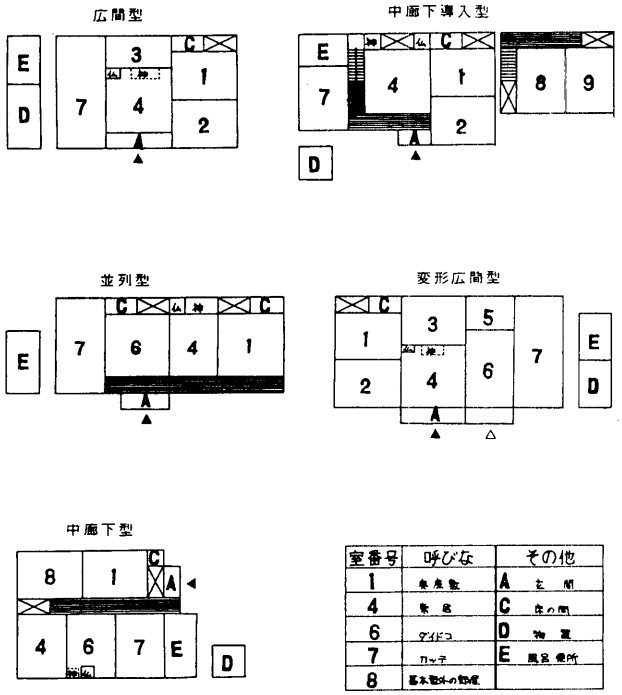


図5－3　類型別平面構成

5－3．住様式

室番号は1＝「奥座敷」，2＝「前座敷」，3＝」部屋」，4＝「常居」，5＝「納戸」，6＝「ダイドコ」，7＝「カツテ」であり，1階の他の呼び名の部屋や2階の部屋は8以降の通し番号とする。1「奥座敷」＝(就寝)，2「前座敷」＝(就寝)，3「部屋」＝(就寝)，7「カツテ」＝(調理)(調理＋食事)は5類型に共通しており，これらの呼び名の部屋と行為は一致しているといえる。4＝「常居」6＝「ダイドコ」は，団らん・接客・食事の行為の重点の置き方により各類型の特性が現われ，中廊下導入型・中廊下型では(就寝)といった新しい行為が現われ，特に中廊下型の4＝「常居」にその傾向が顕著に現われている。これらの特性は行為の複合性にもつながり，中でも(調理＋食事)の行為が中廊下系では圧倒的な高い数値を示し，中廊下系平面型は新しいものであることから，(調理＋食事)のD.K形式に全体的に移行しているといえる。行為に対する面積は，就寝＝6畳・8畳・4.5畳構成と他の行為は6畳・8畳から構成され，就寝の面積は5類型共通しているが，団らん系・接客系に係わる部屋の面積は中廊下系以前の従来の平面型においては8畳が多く，中廊下型では6畳が多くなり，中廊下導入型ではその中間的存在にある。調理系の部屋は従来の平面型では非常にばらつきが大きいのに対し，中廊下型では6～8畳と格一的である。全体の傾向として従来の平面型から中廊下系平面型の移行は一室規模が行為に関係なく6畳に格一化される傾向が強い。

5－4．住空間構成の変化過程

A　広間型:建築年代は昭和8～11年と昭和30年に集中し，前者は区画地，後者は低地に建てられたものである。延床面積は，区画地では100～132m²・133～166m²が主で2階建てもあり，居室数は6～8室あり，2階は2～3室となる。低地は67～99m²のものが主であり2階建ては少ない。

B　変形広間型:変形広間型は区画地に見られる型で，建ペイ率は70～50%，建築面積は110～90m²位である。建築年代は昭和8～20年が殆んどであり，延床面積は100～132m²・133～166m²，居室数は8～9室が多く，1階居室数は6～7室であり，2階居室数は2～3室が平均的である。

C　並列型:建築年代は昭和8年以降であるが，昭和8年の延床面積133～166m²，昭和8～40年の100m²以下，昭和40年以降の100～166m²の3グループに分れ，2階建ては昭和40年以降に建てられている。居室数は4～7室に分布しているが，他の平面型より比較的小規模である。

D　中廊下型・中廊下導入型:建築年代は昭和40年以降に集中し，延床面積は圧倒的に100～132m²が多く，全体的に他の平面型より大きく，2階建てが多い。居室数は6～8室で2階居室数は2～3室である。建築年代は，昭和40年以降であり，延床面積は100～132m²が多いことから，2階建てであり，居室数は7室が主であり，2階による個室化を図っている。

田ノ浜地区における住宅の改善は，近年頻繁に行なわれ，増築の多い箇所は2階・風呂・便所・カツテであり2階の増築は子供部屋・寝室用であり，風呂・便所は主屋外を主屋に接続させ，カツテは厨房設備交換と椅子の食事形態可能な面積にするための増築である。風呂・便所・カツテの増築は広間型の建築年代が昭和10年代に集中1，2階の増築は中廊下導入型の建築年代が昭和40年代と，並列型の昭和20年代のものに多く，並列型は居間や寝室の1階の増築もしている。

広間型・変形広間型の建築年代が昭和30年以前のものはカツテの改築がほとんどであり，昭和10～20年代に建

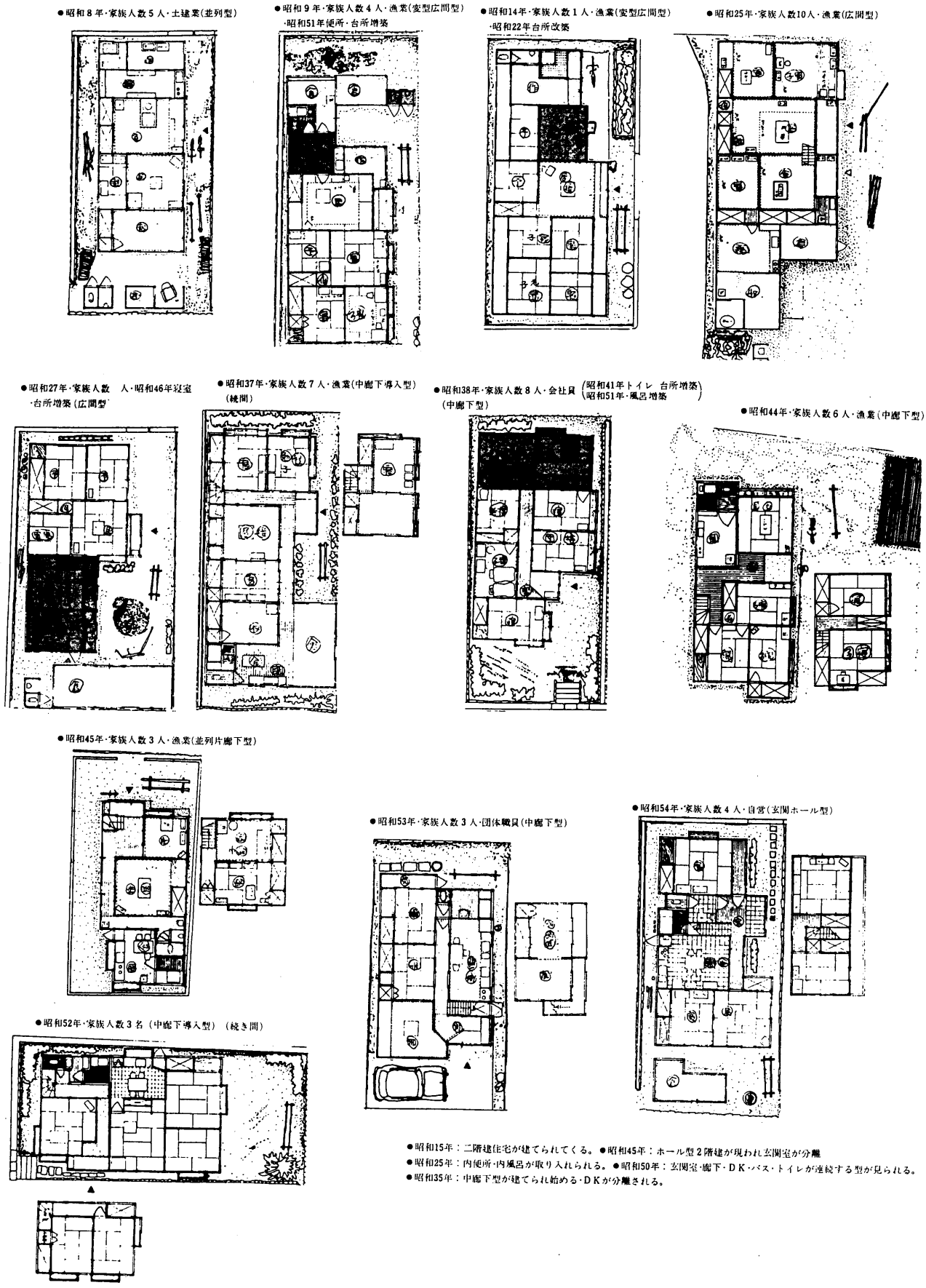

●昭和８年・家族人数５人・土建業(並列型)
●昭和９年・家族人数４人・漁業(変型広間型)
・昭和51年便所・台所増築
●昭和14年・家族人数１人・漁業(変型広間型)
・昭和22年台所改築
●昭和25年・家族人数10人・漁業(広間型)
●昭和27年・家族人数　人・昭和46年寝室
・台所増築(広間型)
●昭和37年・家族人数７人・漁業(中廊下導入型)
(続間)
●昭和38年・家族人数８人・会社員 (昭和41年トイレ 台所増築 昭和51年・風呂増築)
(中廊下型)
●昭和44年・家族人数６人・漁業(中廊下型)
●昭和45年・家族人数３人・漁業(並列片廊下型)
●昭和53年・家族人数３人・団体職員(中廊下型)
●昭和54年・家族人数４人・自営(玄関ホール型)
●昭和52年・家族人数３名 (中廊下導入型) (続き間)
●昭和15年：二階建住宅が建てられてくる。●昭和45年：ホール型２階建が現われ玄関室が分離
●昭和25年：内便所・内風呂が取り入れられる。●昭和50年：玄関室・廊下・ＤＫ・バス・トイレが連続する型が見られる。
●昭和35年：中廊下型が建てられ始める・ＤＫが分離される。

図５－４　住宅の変化過程

てた中廊下型・中廊下導入型には内装改築が顕著である。また，広間型・変形広間型の外装の手直しも数件あげられる。改築年代はいずれの場合も昭和40年代以降であり特に50年代前後に集中している。増改築とも昭和40年代以降，50年前後に行なわれるものが多く，設備や生活様式（食事の仕方）の変化を受けるカツテの増改築が顕著である。居室増築は就寝分解・子供の個室化によるものであり，区画地では敷地の関係もあるが，寝室・子供室は2階に増築されている。また2階を設ける時は神棚の上にあたる部分には居室をつくらない慣習がある。

6．まとめ

前年度調査の京都府伊根，三重県相賀浦，千葉県勝山及び本年度調査の高知県久礼，千葉県北青柳，岩手県田の浜の5地方6集落の比較より「漁村住宅の空間構成と住様式及びそれらの更新過程の一般性と特殊性」についてまとめを行う。本研究では，漁業生産条件や集落条件を越えて共通な事象を一般性といい，集落条件に規定された個別な事象を特殊性という。したがって，5地方6集落の比較は漁業生産条件と集落条件を軸として比較検討する。

6集落の背景である漁業生産条件（漁業形態）と集落条件（立地，地形，集落形態）は表6－1に示すとおりである。千葉県房総地方が2集落，発達した漁港を持つ塊状市街化の漁船漁業を基幹とする総合漁業の集落が久礼と勝山の2集落，津波により移転，計画的に作られた集落が相賀浦，田の浜の2集落，特殊条件としては他に北青柳が元のり養殖漁村（昭和36年まで）で現在近郊農村，久礼は昭和7年の大火による全焼失，復興の集落である。伊根は古くから大型定置網漁業で栄え，現在はそれと船団漁業を基幹とした総合漁業で，狭後背地の列状集落である。他の5集落は比較的広い後背地の塊状集落である。

6－1．住空間構成

(1) 敷地，住棟構成

敷地規模は久礼が40～200m²で最も小さく，次いで勝山，伊根の順で，北青柳が200～1000m²と最も広い。これは漁業の発達の過程によるものであろう。すなわち，大中型船漁業が発達した久礼，勝山は過密，密住の居住地が階層分化した市街地を形成し，敷地規模も階層分化しているが全体的に小さい。定置網漁業を基幹に発達して来た伊根も密住であり，宅地規模は等質的でやや小さい。のり養殖漁村は農業的生産形態で，漁業権の制限は厳しく，疎住または集住集落となる。元のり養殖漁村で現在混住農村の北青柳は疎住で敷地規模は大である。津波対策として計画的に作られた相賀浦，田の浜は150～300m²と若干敷地規模は大で等質的である。漁業集落の敷地規模は集落条件による特殊性ではなく，漁業生産形態と関わった傾向を有する一般性といえる。すなわち，漁船漁業の発達は生産手段を持たない大勢の乗組員層や陸界には住居のみ在れば生産手段としての空間を要しない中小型船主が集中し，漁場も競合せずに居住することが可能となる。大型定置網は生産性は高いが限界があり，居住者を歴史的に制限して来た。のり養殖漁村は地先漁場は砂浜海岸で貧漁場であり，海面を区画使用するため居住者は制限され密住とはならない。

屋敷構，住棟構成も同様に漁業生産形態が集落形態を規定し，漁業条件と関わった傾向を示す。すなわち，漁業の発達した久礼，伊根，勝山は屋敷構を持たず，久礼及び勝山は大部分が主屋のみの1棟構成である。伊根は山側主屋，海側船屋の2棟構成で，定置網の豊漁の時に一斉に船屋を建ててきた。農村でもある北青柳は主屋＋はなれ＋納屋＋（便所，浴室）の3～5棟構成で屋敷構を持つ。計画的に作られた相賀浦，田の浜では主屋＋納屋＋（便所）の2～3棟構成で屋敷構を持っている。

(2) 住宅規模

住宅規模は敷地規模に規定されており，それは上記の様に漁業生産形態に規定されている，漁船漁業の発達している久礼，勝山は40～200m²と漁業経営階層毎に階層分化し，乗組員層や小型船主層は小規模であり，全体的にも規模は小さい。伊根は漁業経営階層による階層分化は少なく，明治末以前の定置網漁の株持漁家か，それ以後の新漁家かにより2分される。旧株持層は方形敷地，それ以後の新漁家は短冊形敷地であり，住宅の床面積の差は少ないが形状に大きな差がある。北青柳は敷地条件もよく70～200m²，6～8畳間4～10室構成と大規模で，新築住宅ほど規模が大となり，経営階層間格差は少ないといえよう。計画的に作られた相賀浦，田の浜は60～150m²，70～150m²，4.5～8畳間の4～8室構成と似ている。久礼は3～4.5畳間，4～8室構成と小規模でありこの地方特有のものであろう。一般に太平洋西区は小住宅であるといわれ，特に高知県は小規模であるといわれている。[*1]

漁業集落の住宅規模は第一に漁業条件に規定され，次いで地方性に規定されているといえよう。すなわち，漁業生産形態別に階層性があり，第2には南方の暑い地方か，北方の寒い地方かの地方性があるといえよう。

(3) 住宅平面構成（間取り型）

間取り型は地方により異なる。個別集落毎に特殊なものというよりも，共通の風土性を持つ地方ごとに共通なものといえよう。すなわち，久礼は「中土佐型」ともいえる2室構成を基調とし，伊根は田の字型系とたて列型系，相賀浦は広間型を基調としたもの，千葉の2集落は「続き間」並列型を基調とし，田の浜は岩手県に一般に見られる「常居広間型」を基調としている。地理的には若干

離れており，漁業生産形態は全く異なるが，同じ房総半島内である勝山と北青柳とは同じ基本型である。これら地方により間取り型が異なるのは気候及び歴史的社会的経緯の相違に根ざすものであろう。社会的環境が似て来ているせいか基調型を残しつつ中廊下導入型が共通して増えている。また，生産条件に規定された敷地形態に間取り型も規定されている。それが伊根にも久礼に似たたて列型が近年増加していることである。短冊型敷地は当然間取り型をたて列型系にする。逆に，奥行きの短い敷地では並列型にする。久礼，相賀浦，勝山，田の浜と伊根以外の全集落に並列型が現れている。これらは外形は並列型であるが，基調は中土佐型，続き間型，常居広間型であり，敷地による間取り構成の規定は第2次的なものであるといえよう。

6－2．住様式

(1) 住生活

漁業集落の住様式は住空間を場として日常生活，非日常生活を通し，地域社会生活（S生活），家族生活（F生活），個人生活（P生活）及びイエ生活（I生活）の4つの生活の時間的変化の空間的表われとして捕えられる。住宅内の生産生活は副次的なもので次項で述べる。地域社会生活（S生活）とは非日常生活で冠婚葬祭，講，オコモリ等の人寄せ行事のことである。家族生活（F生活）とは食事，団らん，家事サービス等の日常の家族の集団的生活行為である。個人生活（P生活）とは個室を要するような就寝や勉強等の個々人の日常生活のことである。イエ生活（I生活）とは「お正月様迎え」や「盆」の行事に代表される家族，身内の非日常的行事で一定の「しつらえをした空間」を要する生活である。

全集落に共通するのは2階はP生活の空間である。1階は図6－1に見るように間取り型により4つの生活の表われ方が異なるが，4つの生活の一定の型(「住様式」)を有する生活の場である。

全体に共通することは「お正月様迎え」等のI生活が存在することである。この空間は間取り型により位置が異なるが，神棚にお神酒，お供えをすること，床の間に軸を掛け，松，榊等を生け，お供えを三方に盛る。この前で家族員，身内が集まり挨拶を行う。飾り付けをした床の間の前で家族員が共食をする場合もある。神棚と床の間の在る室は間取り型により異なる。常居広間型と中土佐型では同一居室にあり，前者は「常居」と呼ばれている。後者は床の間の隣の天井下に「高神様」として置かれている。続き間型系や田の字型系，伊根のたて列型系では神棚と床の間の室は分離している。

地域社会生活であるS生活は相賀浦を除いた全集落で行われている。特に伊根と勝山は活発である。相賀浦は集落移転後，「くじ引き」で敷地を決定したため歴史的な近隣生活が一時崩壊したこと，さらに戦後の真珠養殖の導入により共同体員は競合関係となり，S生活は消滅した。間取り型は人寄せを主体とした広間型を基調としているが，S生活はなく形骸化している。同じ移転集落の田の浜はS生活が変質して継続している。近隣の人々のS生活はやはり崩壊したが，同じ集落内や近辺の血縁者によるS生活がある。このため常居及び続き間が必要となっている。S生活は続き間座敷が専ら使われている。久礼のたて列型と伊根のたて列型系では主として床の間のあるオモテの座敷1室が使われる。たて列型系では「続き間」接客は少ない。勝山や北青柳ではS生活は活発で「続き間」として専ら使われている。

P生活，F生活，S生活の空間的重複性が無いか極めて少ないのは伊根の田の字型系及び久礼を除いた全集落の中廊下導入型である。その意味でこの型は進んだ間取り型といえよう。住様式が全く同じといえるのは勝山と北青柳の千葉県の2集落である。これは両集落とも続き間を基調とする間取り型である。伊根と久礼のたて列型も類似している。

住様式を規定するのは第一に間取り型といえよう。それは一定の地方性の反映であるといえよう。また，第二に近隣社会生活の性格である。同型または類似の間取りであっても近隣社会生活の性格が異なれば住様式も異なる。この端的な現われが相賀浦のS生活の消滅または外化といえよう。また，変化し易いものとしてS生活があげられよう。S生活とI生活は空間的には同一であり，また，S生活そのものがイエシンボルとしての神棚や床の間等のしつらえを必要とすることからも類似あるいは同性格のものであると思えるが，I生活の方が変化が少なく継承性があるといえよう。田の浜ではS生活がシンボルである常居から分離しつつあり，続き間の接客座敷として様式化しつつある。全体的にはP生活を2階に確保することにより，F生活，S生活，P生活は分化しつつある。

(2) 生産生活

漁業集落の住宅内における生産生活は農業の場合と異なり，副次的なものであり，住空間構成への規定性は無いといえよう。住宅内の漁業生産行為は補助行為としての漁具の整理と修理がある。住宅内で漁業生産行為を行っているのは伊根と勝山である。両集落とも漁業経営階層により異なる。大型船主層や大型定置網等の大経営層は住宅内では行わない。小型船主層の一本釣りやはえ縄漁が住宅内で生産の補助的行為を行うのみである。網類の手入れは広い空間を必要とし，漁具庫内や共同網干場，浜，広場等で行われる。また，船上で行われる場合も多い。いずれの場合も住空間構成を規定するものではない。久礼の「乗り初め」の宴会，勝山や久礼の一本釣り大型船主層の出漁前後，出漁中のオコモリは生産生活

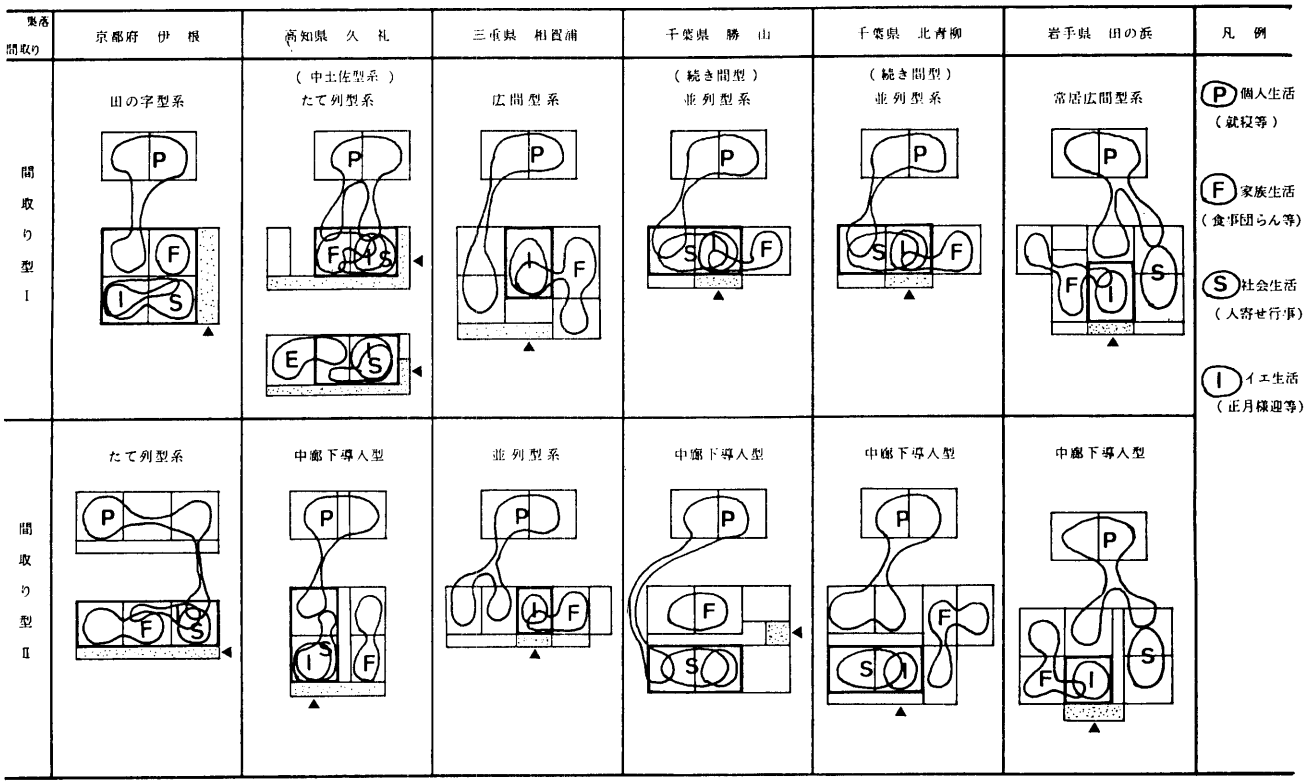


図６－１　集落別住様式

の一環ではあるが，Ｓ生活のオコモリと同じカテゴリーである。漁家にとって重要な空間の一つは漁具庫であり，これは経営規模に応じて設ける必要がある。しかし，小型船主層を除き主屋と同一敷地内の必要はない。伊根の船屋を除き他の集落は主屋から離れた海岸に集中している。小型船主層は小型漁具であり，主屋内で修理を行う場合が多く，同一敷地内に漁具庫を設ける必要がある。乗組員層の大部分は小型船主になること，また，休漁中（２ケ月間）は小型船主となる場合が多く，漁具庫は必要な空間である。

６－３．住空間構成の変化過程

住空間構成の変化過程は全集落を通してほぼ共通している。すなわち，基本間取り型→２階建化→炊事場の主屋内化→便所，浴室の主屋内化→土間の消失，炊事場，便所の床上化→中廊下導入，個室確立化の方向である。注目されることは，どの集落もその集落の基本間取り型である「四つ間」「続き間」「常居」などの空間を残しながら居室を増加し，個室確立へと変化していることである。また，密住性という漁業集落の特性より「通り庭型」あるいは同型列の「たて列型系」が伊根や久礼に増えている。これらは「田の字型系」とは別の住様式を作り出している。並列型も敷地条件に規定されて出て来た型であるが，各々が「中土佐型」や「常居」等の基本型を有したもので住様式までは変化させていない。大きく間取り型を変えたのは北青柳で「田の字型系」→「続き間型系」→「中廊下導入型」へと変化している。これにより「続き間」を持つ種々のバリエィションが出現しつつある。漁業集落の住空間構成の変化はＳ生活やＩ生活を消滅させ「居間中心型」や「公私室型」等の「都市住宅」へと変化するのでなく，伝統的なＳ生活やＩ生活を継承し，居室を増やしながらＰ生活やＦ生活も充足させて行く方向で変化している。

６－４．住宅改善及び供給における計画上の留意点

漁村住宅は漁業生産条件及び集落条件に規定された住空間構成と住様式をしている。また，その変化方向は共通しており，伝統的な生活空間と住様式を継承しながら個室確立の方向に変化している。これらより以下の諸点が住宅改善及び供給における留意点として指摘できる。

① 当該集落の住空間構成の基本型を見い出すこと。

② 基本型に代表される地域社会生活やイエ生活を充足させること。これらを無視した「都市的」なるものは慎しむべきである。

③ 特に１階はＩ生活空間，Ｓ生活空間，Ｆ生活空間を充足させること。２階はＰ生活の個室，その他の多様性を持たすことができる。

④ のり養殖漁村を除き一般的には密住街区が多く，日照や通風の確保が必要である。特に２階建化が顕著であることからも十分留意する必要がある。

⑤ 漁業の発達した集落は住宅規模の階層間格差が顕著であり，乗組員層や小型船主層は小住宅でＳ生活の充

表6－1　まとめ

		1. 高知県 久礼集落	2. 千葉県 北青柳集落	3. 岩手県 田の浜集落	4. 京都府 伊根集落	5. 三重県 相賀浦集落	6. 千葉県 勝山集落
1	立地・地形	・湾内築港 ・後背農地 ・旧城下町 ・地方港湾 ・大火消失集落	・内湾 ・埋立後背地 ・旧ノリ養殖漁村 ・港なし	・内湾築港 ・狭後背地 ・津波高所移転集落 ・第2種漁港	・内湾立地入江 ・崖下狭後背地 ・第2種漁港	・湾口入江 ・緩傾斜狭後背地 ・津浪移転集落 ・第2種漁港	・内湾築港 ・広後背地農地有 ・旧城下町 ・第2種漁港
2	集落形態	・塊状大規模集落（6,342人） ・街区密度階層分化 ・居住地階層化	・塊状中規模村 ・疎住集落	・塊状中規模集落（1,600人） ・高地格子状計画街区，低地網状自然街区	・列状中規模集落（人口1,654人） ・一様密住集落	・塊状格子状街区中規模（人口1,500人） ・密住集落 ・計画集落	・市街化大集落（人口6,183人） ・密住密度階層分化
3	漁業特性	・総合漁業 沖合一本釣 大小漁船漁業 定置網	・元ノリ養殖 ・現混住農村	・総合漁業 ホタテ貝，昆布養殖 大型定置網 中小漁船漁業	・総合漁業 漁協大型定置網 漁協巻網船団 中小型船漁業	・複合漁業 遠洋一本釣 真珠・魚養殖	・総合漁業 大・小漁船漁業 養殖漁業 大型定置網
4	住棟構成	・敷地面積 40～200㎡ ・主に屋敷構無し ・主屋＋釜屋（2棟） 主屋のみ（1棟）	・敷地面積 200～1,000㎡ ・主屋＋はなれ＋納屋（3棟） 主屋＋納屋（2棟）	・敷地面積 150～300㎡ ・屋敷構有 ・主屋＋物置＋便所＋（風呂場）（3～4棟）	・敷地面積 60～200㎡ ・屋敷構無し ・主屋－船屋2棟構成 船屋内浴室・便所	・屋敷構有 ・主屋－物置・外便所構成（広間型） ・主屋－物置構成（中廊下導入型）	・敷地面積 40～200㎡ ・屋敷構無し ・階層間格差有 大型船－同一敷地内 小型船－共有地
5	住宅規模	・40～120㎡ ・4～8室構成（3～4.5畳構成） 全体的に小規模 ・階層間格差有	・70～200㎡ 4～10室構成（6～8畳構成） 全体的に大規模	・70～150㎡ 4～10室構成（4.5～8畳構成） 大中規模 地区間格差有	・延床70～150㎡ ・階層間格差小 ・新（小）－旧（大）間格差 4～8室構成（4.5～8畳構成）	・延床60～150㎡ ・立地による格差有 ・漁業階層間格差小 4～8室構成（4.5～8畳構成）	・延床60～150㎡ ・漁業経営階層間格差大 4～8室構成（4.5～8畳構成）
6	住宅平面構成（間取り型）	・「中土佐型」（主屋＋カマヤ） たて列型 中廊下導入型 並列型	・「続き間型」 並列型 中廊下型	・「常居広間型」 広間型 並列型 中廊下導入型	・2タイプ分化 田の字型系 たて列型系	・3タイプ分化 広間型系 並列型系 中廊下導入型系	・規則性小 並列型系 中廊下型系 中廊下導入型
7	住宅密度特性	・建ぺい率 60～95％ 全体的に高密 中央部非漁家やや低密	・建ぺい率 10～30％ （主屋のみ） 非常に低密	・建ぺい率 30～75％ ・高所高密，低地低密	・建ぺい率 50～95％ ・平面型による差 [illegible]－小規模高密度 田の字型系－大規模中高密度	・平面型敷地面積と関係有 並列型－小規模高密度 広間型，中廊下導入型－中規模中密度	・建ぺい率 60～90％ ・漁業経営階層間格差有
8	日常的住生活	・1階：地域，家族，個人生活混在 ・2階[illegible] 「中土佐型生活」	・1階[illegible]個人生活分離 ・2階：個人生活 「続き間型生活」	・1階：地域，家族，個人生活分離 ・2階：個人生活 「常居広間型生活」	・1階：地域，家族，個人生活分離 ・2階：個人生活空間 「田の字型生活」	・家族・個人生活重視 1階：家族生活，2階：個人生活	・続き間家族生活に利用 2階：個人生活 「続き間型生活」
9	非日常的住生活	・地域伝統生活重視 お正月様迎 乗り初め 祭りの接客行事	・地域伝統生活尊重 講 続き間客寄	・地域伝統生活の重視 親族集団の行事 続き間接客 ・正月，常居室行事	・地域伝統生活講，祭り 続き間客寄（田の字型系） 一室客寄（たて列型系）	・住宅内では行わない ・公共施設依存	・地域伝統生活講，オコモリ 続き間客寄
10	生産生活	・住宅内では行わない ・浜，船上，漁具庫前	・漁業は行っていない 住宅内では生産は行っていない。	・住宅内で漁業生産行為は行わない ・漁港周辺の納屋，空地	・漁法により相違 船屋の高度利用 小型船漁業は生活空間と重複	・住宅内では行わない 生活と生産の分離 元集落（浜）で生産活動	・漁法により分化 小型船漁業は生活空間と重複
11	住空間の変化過程	・平家中土佐型→2階建→中廊下導入→土間消失→個室化 ・伝統生活重視個室化	・田の字型→続き間型→土間消失→2階建→中廊下導入型 ・伝統生活尊重個室化	・常居広間型→2階建→中廊下導入→個室化 ・伝統生活の変質個室化	・田の字型系→たて列型系へ ・2階建個室増加 ・土間消滅 ・伝統生活尊重個室化	・広間型→中廊下導入型へ ・2階建個室増加 ・土間消滅 ・伝統生活消滅個室化	・並列型→中廊下導入型へ ・2階建個室増加 ・伝統生活尊重個室化

足やP生活の確立が出来ない例もある。これらの階層にもS生活やP生活が確立出来るよう考慮する必要がある。

⑥ 漁家に漁具庫は必須空間であり，経営規模に応じた規模とすべきである。その際，漁民アパートや借家等を乗組員層や小型船主層に供給する場合にも漁具収納空間を確保することが必要である。小経営を除き漁具庫は必ずしも主屋と同一敷地内とする必要はなく，共同化は積極的に推進できる。

⑦ 伊根の田の字型系ではP生活空間が貧弱であり，十分の広さと採光を確保する必要がある。

⑧ 久礼では全体にP生活とS生活，F生活の重複性が高く，P生活を確保するための個室の増加が必要である。

⑨ 計画的移転集落ではS生活が変質し，ひずみが生じたり，消滅している場合もある。これは「くじ引き」による敷地選択の結果であり，可能なかぎり元のコミィニイティを継承した移転とすべきであろう。

⑩ 移転集落の相賀浦や田の浜では近隣の社会生活が円滑に形成されるようなソフトウエア面での生活改善が必要であろう。

あとがき

2年間の調査研究により上記の様な諸点が明らかとなりその成果は大であると思う。しかし，気候の大きく異なる地方（海区）である北海道区，日本海北区及び東シナ海区の事例調査が出来なかったのは残念である。何らかの機会をとらえ，これらの地方の事例を加え本研究を完結したいと思う。また，2年度研究の一つの目的であった生産供給については，住空間構成や住様式の解明を優先させたため本研究では究明することが出来なかった。これも今後の課題としたい。最後に本研究に援助および協力いただいた東工大青木志郎教授，東大鈴木成文教授，京大巽和夫教授，大阪市立大持田照夫教授をはじめ調査にご協力していただいた関係大学の学生及び現地住民の方々に深く感謝します。

＜研究組織＞

研究主査　小泉正太郎　千葉大学工学部教授
委員　宮崎　隆昌　日本大学生産工学部助手
三国　政勝　千葉大学工学部助手
斉藤　輝二　京都大学工学部大学院生